



馬耳東風

今は廃刊となってしまったが、現代教養文庫という社会思想社から出されていた文庫本のシリーズがあった。岩波や角川の文庫本とは異なり、どの本も色鮮やかなカラーのカバー表紙であった。この中に「格言の花束（堀秀彦編）」というのがあり、若い時いつも持ち歩いていた。「朝の来ない夜はない」という言葉を見つけたときは、ちょうど精神的に苦しかったときで、大変勇気づけられたことを記憶している。この本が契機となって、ラ・ロシュフーコーの「箴言集」やピアスの「悪魔の辞典」を読んだが、これらの本には、わずか一行のなかに数編の小説が書けそうな内容が凝縮されている文章が満載されていると言っても過言ではないと思う。格言や諺は、人生を深く洞察して初めて到達する境地をひとことで表現したり、あるいは物事の側面を斜にみた言葉があったりして興味が尽きない。人種や言葉が違ってても似たような諺があるのを知ると、人間の共通性が感じられてうれしくなる。と同時に表現の違いにお国柄や歴史が垣間見られて興味深い。脳の老化を少しでも遅らせられるのではないかと期待してスペイン語を勉強しているが、私が使っているスペイン語の辞書には諺が多く収載されていて老齡の初学者には都合がいい。

「紺屋の白袴」, 「手鍋下げても」, 「馬子にも衣装」なんて日本だけだろうと思いきりこんでいたが、スペインにも「鍛冶屋の家で木のスプーン」, 「あなたとならばパンとたまねぎ（だけでいい）」, 「きれいなマントはすべてを隠す」と同じ意味の諺があった。「ゆっくり服を着せてくれ、急いでいるから」は、「急がば回れ」に相当する。ちょっと意味がわかりづらいが、中世の王様は家来に服を着せて貰っていたことから生まれた諺である。

「鳥なき里のこうもり」とは、鳥がいないところでは、空を飛べると言うことだけでこうもりが威張るということから、優れた人がいないところでは、つまらない者が幅をきかしているということの意味する言葉である。が、メタファーが効き過ぎて説明されないと真意がわかりづらい。何とも日本的な〈奥ゆかしい〉表現と言えよう。これに対してスペイン語では、「盲人の国では片目が王様」ということを知った時には、「なんと直接的な表現か」ととても驚き、スペイン人は菌に衣着せずいうモノを言う国民性なのかなと思った。しかしこの諺の源はオランダのユマニスト、エラスムスがラテン語で書いた本（「痴愚神札賛」ではないようだが）にあり、それがスペイン語に限らず各国語に訳されて、西欧では広く知られる諺になったということのようである。

最近の世の動きというか政治家達の言動には、信じられないようなことが多すぎると感じているのは私だけではあるまい。原発事故の原因究明と確実な再発防止策が確立されず、しかも核廃棄物の最終処分策もないまま原発再稼働にひた走る人たち、時の為政者の暴走を抑止するためにある憲法、その解釈は長い時間をかけて国民の合意形成が図られてきたにもかかわらず、いっさいを無視し国会の論議を経ず閣議決定してしまった政治家たち、下品なヤジを飛ばしたにもかかわらず平気で「寝耳に水だ」と嘘をついた都議、この不誠実を黙認しかばう同会派の都議達。しかしこれらはみんなわれわれが選んだ人たちのだから、エラスムス先生の言を待つまでもなく全てわれわれの責任ということになる。何を言っても「馬耳東風」のこういう人達を、次回の選挙で一掃しなければ毎日が不愉快でたまらないと思うのは年寄りの僻目なのだろうか。

（久）